

臨床検査部

1. スタッフ（平成28年4月1日現在）

部長	（教授）	谷口 信行
副部長	（教授）	山田 俊幸
副部長	（准教授）	紺野 啓
医員	（講師）	鯉淵 晴美
	（講師）	岩津 好隆
	（助教）	去川 睦子
	（助教）	中澤 昌子
シニアレジデント		1名
技師長	臨床検査技師	橋本 好一
副技師長	臨床検査技師	筑後 史子
副技師長	臨床検査技師	宮澤 義
副技師長	臨床検査技師	日高 裕介
副技師長	臨床検査技師	高浪 勝利
技師配置	検体・生理検査	79名
	検診センター	4名
	生殖医学センター	3名
	とちぎ子ども医療センター	5名

2. 臨床検査部の特徴

自治医大附属病院の特徴は、自治医科大学の建学の理念を実現するために、地域の診療に従事する医師を養成する臨床の場としての役割を担う点である。一方、地域の高度な医療施設としての役割も果たしている。従って、臨床検査部門は、臨床検査医学と一体になり、自治医科大学附属病院が質の高い医療レベルを維持・遂行するために貢献することを使命としている。臨床検査部は、昭和49年4月以来約42年間にわたって活動してきたが、病院のリニューアルに伴い、平成17年度には検体部門が、平成19年度中には生理機能部門が、機能的に連携を図る意味で、旧手術室跡地に隣接した場所に移転した。

検体検査部門の業務は採血収集、一般、血液、臨床化学、血清、遺伝子、細菌などに分けられ、生理機能検査部門は循環器、脳神経、呼吸器、超音波に分けられる。また、新棟や子ども医療センターおよび健診センターにはサテライトの検査室があり、各々に技師を配置し検査を行っている。

その一方で、さいたま医療センターとの連携を積極的に図るため、部長・技師長による連絡会議を2ヶ月に1度開催し、両病院の情報の共有に努めるとともに、技師の人事交流を継続している。

臨床検査部門で行っている専門医の研修は、臨床検査医学会認定の臨床検査専門医、超音波医学会認定の超音波専門医であり、複数の臨床検査部医師は両学会の専門

医を取得し、若い医師を指導している。また、超音波医学会が行う臨床検査技師の超音波検査士の施設認定も取得しており、現在8名の超音波検査士が認定されている。また、超音波専門医、認定超音波検査士が医師、技師の育成にあたっている。

・認定施設

日本臨床検査医学会認定研修施設
日本超音波医学会認定研修指定施設

・認定医

日本臨床検査医学会認定専門医 山田 俊幸 他3名
日本超音波医学会認定専門医 谷口 信行 他4名

3. 実績・クリニカルインディケーター

1) 診療実績

臨床検査部の診療は、検体検査部門と生理機能検査部門の2部門に分けられる。検体検査は、尿、血液などの分析により、血液尿一般、化学、血清、免疫、遺伝子などの検査を行う。生理機能検査は、心電図、脳波・筋電図、呼吸機能、超音波検査、脈波検査などにより、直接患者の病態を把握するものである。

平成27年の1年間では入院、外来の検体検査、生理機能検査を合計して、およそ643万件の検査を行った。新たな検査の導入は、これまで設置されていた臨床検査運営委員会に代わり、平成20年度に発展的に改組した臨床検査運営委員会で検討し、そこで承認を受けたものを採用している。臨床検査部は、本館1階の検査部門に加え、新棟のサテライト検査室、とちぎ子ども医療センター、健診センターの検査室、生殖医学センター、耳鼻科外来などでも行っており、各所で臨床検査技師が活躍している。採血は平成24年より1階の検査室の1箇所で行っている。学生実習では、4年生のBSLにおいて、病院検査の説明、検体の準備などについては医師だけでなく検査技師によるサポートも行われている。臨床検査部の医師は、それぞれの専門分野で活躍するとともに、各科の医師と連絡を取りながら、検査を円滑に行うためにアドバイスをを行っている。新たな検査法の導入、開発はもちろんのこと、学生や研修医教育にも積極的に関わり、検査法の改善、精度管理を行うことで、最新の検査室活動を進めている。臨床検査部をローテートする研修医は常時2-3名程度おり、その多くは超音波検査の研修をおこなっている。検査の中で、免疫電気泳動、骨髄像、超音波診断、肺機能検査、負荷心電図、ホルター心電図、脳波や筋電図の実施判読などの高度な判断が必要

な検査については、検査部に関連する専門の医師が直接、検査の実施や報告書の作成を行っている。また、検査部の医師は、臨床検査運営委員会、院内感染対策委員会、HIV感染対策委員会、ICT、MRSA委員会、安全対策委員会、医療機器委員会などの多くの院内委員会において活躍している。検査部の技師は、病院の検査の精度管理の一環として、栃木県の精度管理委員会为中心的役割をはたしている。また、細菌検査室の技師は、院内の感染症関連の部門に結果を連絡するとともに、その委員としても参加している。

なお、本院職員に臨床検査の情報を伝え、連絡事項などを迅速に連絡するため毎月「ラボニュース」を発行している。

2) 臨床検査部 (2015.1~2015.12)

	区分	入院	外来	合計
検体検査	一般	129,998	247,185	377,183
	血液検査	448,227	476,129	924,356
	血清検査	85,683	332,752	418,435
	採血室 (尿素呼吸試験)	8	699	707
	生化学検査	1,588,668	2,952,926	4,541,594
	遺伝子検査	658	4,947	5,605
	細菌検査	51,543	43,602	95,145
	合計	2,304,785	4,058,240	6,363,025
生理機能検査	循環器検査	24,572	9,950	34,522
	脳神経系検査	1,715	2,137	3,852
	超音波検査	3,627	11,807	15,434
	肺機能検査	2,468	12,208	14,676
	合計	32,382	36,102	68,484
総合計	2,337,167	4,094,342	6,431,509	

3) 先進医療の実績

遺伝子検査は、PCRの導入後その需要は増加し、結核、MRSAなどの感染症に対応した検査施設として構築中である。また、質量分析装置の導入により迅速な同定・感受性検査結果の報告にも寄与している。超音波検査は、日本でも代表的施設となっており、超音波の臨床的有用性に関する研究、音響組織特性に関する研究、超音波造影剤を用いた研究、超音波ドプラ法の新たな利用法、探触子と感染症媒介の可能性、末梢血管の硬さについての研究をおこなっている。

4. 研究業績

学会発表

第64回日本医学検査学会

成人脳波判読結果の医師と臨床検査技師での比較

第47回日本臨床検査自動化学会

ヒモス I L L A陰性コントロールと自家製プール血漿との比較検討

第35回栃木医学検査学会

ニーマンピック病C型の一症例

Unicel DxH800における体腔液、CAPD液細胞数の検討

当院における呼気NO濃度とBRI・アストグラフの関係

冷えがPWVに及ぼす影響～冷水負荷による血管運動神経反射を用いた基礎的検討～

当院超音波検査室における感染対策の現状

Scedosporium prolificans 眼内炎の1例

バンコマイシン血中濃度測定時に異常反応を呈した1症例

第52回日臨技関甲信支部 医学検査学会

パネルディスカッション 若手技師セミナー

「未来を受け継ぐ時代(とき)」

「技師間や他職種と上手に付き合っていくには」

5. 事業計画、来年の目標等

今年も診療報酬の見直しにより、既存の臨床検査項目の点数の再検討が行われた。

これに伴い検査法の見直し、検体検査管理料加算を含む新たな加算の導入を取り入れること、加えて試薬の効率的運用などの経営努力により対応しており、今後も努力を続けてゆく。また、平成25年度より行っている午前7時30分からの採血は、検査結果を早期に依頼医師に返し診療を円滑に行うためのものであり、迅速検査加算の収益も増加してきている。今年から、ISO15189の認定取得のための作業に着手し、さらなる患者サービスの向上と検体検査管理加算の増額を目指す。

精度管理は臨床検査にとって最も根幹になるもので、今後も配慮してゆきたい。さらに大学の附属病院であることを考慮し、今後とも、病院内部での検査実施に重点をおきながら、信頼される検査部をめざしている。外部精度管理は、これまでと同様CAP、日本医師会、日本臨床検査技師会、栃木県などで行う。

内部の研修事業として、検査データの判読、エコーカンファレンス、文献紹介などを行う。